

## 二〇二四年度 一般入試A日程

# 国語

### 〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は26ページ、解答用紙はマークシート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、解答用紙（マークシート）に記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、解答用紙（マークシート）の所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、解答用紙（マークシート）の左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

# 国語

(60分 100点) (解答番号

1

〜

35

)

第一問 次の文章は、越谷オサムの『たんぼぼ球場の決戦』の一節である。主人公の大瀧鉄舟はかつて智修館高校の野球部のエースピッチャーとしてもはやされてきたが、挫折し野球の道をあきらめ、現在はアルバイトとして働いている。そんな鉄舟が、母の働きかけにより草野球クラブを作り、野球部の主将だった阪野航太郎にコーチ兼投手を頼み、下は中学一年生から上は六十年代まで、老若男女のメンバーが集まった。本文は鉄舟と航太郎が対ヤナギーズ戦に向けた練習の後、二人で帰っている場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(50点)

「うん。薬師院さん、力量は参加者八人の中で文句なく一番だと思う。次点がかズで。あの二人はマジで使える。ほかはまあ、ヤナギーズの奴に笑われてもしょうがないレベルだけど」

「まあ、な」

わずかに首をかしげてから、コーチ兼投手が顎の先で頷いた。友達の少ない元引きこもりを心中で憐れんでいるのかもしれない。

「あの二人、どっちをセカンドにしてどっちをショートにしようか。遠投力はかズのほうがありそうだけど、薬師院さんの球の持ち替えの速さも捨てがたい」

「うん、そのへんは (1) でいいんじゃない？」

気のない返事に、声がおのずと大きくなる。

「でも、センターラインはしっかり決めておきたい」

「その前に、九人揃えるのが先でしょ。今いる人たちがこの先も続くとはかぎらないし」

(2) にべもない。大学と企業でツチカわれたのであろう俯瞰ふかん的な視点に、キャリアと呼べるものがないアルバイトとして気後れを覚えてしまう。こちらもクラブの代表として何か今後の展望のようなことを言わなければ、会話の釣り合いが取れない。

「だけどほら、この調子だと頭数だけはけっこう簡単に揃いそうじゃん？ あと、別れ際に清瀬さんが言ってた、大阪のボーイズでピッチャーやってたっていう人」

「ああ、なんだったつけ。取引先の、四十くらいって男の人？」

「そう。初回の練習のときもちよこつと話題になってたけど、クラブに入ってくれたら内野はけっこう形になると思うよ？ その人がもしピッチャーで使えそうなら航太郎はサードに戻って、サードの清瀬さんを守備の負担が少ないファーストに回せる。今日から参加のあのほら、細井君、あれはどう見ても守備に難があるんで外野に行ってもらって。なんか、わりといい布陣じゃない？」

前車のブレーキランプを見つめたまま、航太郎が「うーん」と生返事をした。

先ほどからこんな調子だ。こちらが長々と話しかけ、相手がごく手短かに答える。

小雨の中を車がわずかに進み、また停とまる。

(4) 車内に漂ひらいだした気詰まりな空気(5)にアセリを覚えて、鉄舟は言葉を続けた。

「ただそうになると、外野が穴だらけだね。三浦さんはまだマシだけど、でもやっぱり『せめて二十年前に加入してほしかった』って動きだし、あとの大学生二人はどうにもならない。技術的な面は言うまでもないけど、遠藤ほ藤さんに『バックサード』が通じなかったのは衝撃だった」

笑いかけてみたが、航太郎は乗ってこない。さらに続ける。

「まあ、そういうレベルだし、ライトかレフトに飛んだらツーベースは覚悟、つてくらいの気持ちでいないと」

(6) 動きのない車列から目を切り、航太郎がこちらを向いた。

「鉄舟、細井君とキャッチボールしたじゃん？」

「うん」

「彼、そんなにどうにもならない感じだった？」

久しぶりに相手のほうから尋ねられ、勢い込んで隼人の欠点を挙げる。

「まあね。野球は好きなんだろうけど、基本ができてない。肘下がってるしアウトステップ<sup>(注4)</sup>が気持ちだし、コントロール悪くてストレス溜<sup>た</sup>まった。気になったのはとくに肘。素人があの投げ方続けてたらどっか痛めるよ」

「それ、本人に指摘してあげた？」

「え？」

「体痛めるってわかったわけじゃん？ それ、言っただけじゃなかったの？」

静かに問いかけられ、手元に視線をさまよわせながらもっともらしい言い訳を探す。

「いや、今日はほら、初めてだし、まずは力量を量ればって思っただけ」

航太郎が、ため息を一つついた。

「うん、俺たちさ、選手のセレクションしてるわけじゃないのね。高校とか大学の強豪校みたいに『力量見て、基準に達してなかったらバイバイ』って世界の住人じゃないんだよ、もう。セレクトされるのは参加者じゃなくて、俺たちなの。参加してくれた人たちが飽きるかほかのことに興味が移るかして来なくなるまで、元高校球児が丁寧にコーチするのが役割なんだよ。わかってる？」

<sup>(7)</sup> サトすように問いかけられ、口の先で弁解する。

「わかってるよ。でも、人に教えるの初めてだし、最初からうまくはできないもんじゃん、コーチングなんて」

「わかっているようには見えなかったけどな」低い声に、心臓をつつかれる。「鉄舟、できないならできないなりに細井君に、丁寧にコーチングした？ 少なくとも、やろうとはした？」

「だから、できる範囲のことはやってるつもりだよ、俺なりに」

(8)

しながら」

「どこが！」

突然の怒声が、狭い車内を圧した。

「え!! や……」

「どこがだよ。聞こえてんだよ、舌打ち。そりゃ、お前に比べたらどいつもこいつもヘッタクソだよ。『バックサード』も知らないかもしれないよ。投げ方も捕り方もヘッポコだよ。だけどみんな野球が好きで、目標があつて、せっかくの週末を半日潰して、カネまで払って参加してくれてんだよ。それを、ぶつきらぼうな物言いで空気悪くして、ミスが出るたびに顔しかめて舌打ちして、ビビらせてんのがお前だよ。バツカじゃねえの？ コーチングに舌打ちはいらねえってことぐらい、言われなかったってわかんたろ!!」

「いや……」

反論の言葉が出てこない。

聞かれていた。そして、見られていた。航太郎はずっと、こちらの態度に業を煮やしていたのだ。<sup>(9)</sup>

「思い出した」航太郎がハンドルを叩く。<sup>たた</sup>「気持ちのいいものだ」

「え？」

「クラブを始める前、鉄舟が言った目標。アレだ、『グラウンドから怒鳴り声が消えれば、野球はもつと気持ちのいいものになる』。怒鳴り声は消えたよ、たしかに。でも気持ちいいか？ 怪我<sup>けが</sup>のリスクがあるのに黙つてて、しかも本人がいらないところで『ストレス溜まった』とか陰口叩くのは、いくらなんでも陰湿なんじゃねえの？ 聞いててぜんぜん気持ちよくねえ」  
弁解の声は、かえってみじめになるほどか細いものになった。

「だって、航太郎が『そんなにどうにもならなかった?』って聞くから——」

「『だって』じゃねえよ。ひでえこと言ってるの気づかせようとしたのに陰口返してきやがつて。なんていうか、疲れるんだよ、そういうの。月曜から金曜まで得意先のエラそうなオッサンオバサンの皮肉とか悪口とか人を見下した冗談とか、もうげんなり

するほど聞かされて、週末ぐらいはそういうの忘れて野球やりてえんだよ。だから、お前が一個ぐらい細井君のいいところ見つけてやってたら、こつちもこの先もうちよつと頑張れるかなって思ったのに、がっかりさせやがってよ」

<sup>(10)</sup>相手の怒気に圧倒され、言葉を挟めない。航太郎がさらに続けた。

「コーチに誘われたとき、本当のこと言うとかかったるくってしょうがなかったんだよ。土日ぐらいは愛想笑いゼロで時間ぜんぶ自分のために使いたかったからな。でも鉄舟マジで困ってるみたいだし、キャッチボールやってみたらなんだかんだで楽しんでくつて、こつちも付き合ってみようかなって気になったんだよ。俺としても、手助けできればちよつとは決勝戦の罪滅ぼしに――」

航太郎が、ふいに口をつぐんだ。

「え？」

夏の大宮公園球場の残影が、頭の中をよぎる。

「なんでもねえよ。忘れろ」

背後から、クラクションの音が聞こえた。前方に目を転じると、渋滞の列が遠くまで進んでいた。

あ、と思ったときには背もたれに背中を押しつけられていた。足元でエンジンが唸り、前方の乗用車がゲンゲン迫ってくる。

航太郎が車を急発進させたのだ。

「あ、あぶっ――」

ない、の言葉は、<sup>(11)</sup>タイヤの短い悲鳴にかき消された。今度は胸にシートベルトが食い込む。軽自動車は、前車まで1メートルあるかないかの距離で停止した。

アイドリング音の中で、動悸の治まらぬ胸に手を当てる。

「……やめてくれよ、死ぬかと思った」

「悪かったな」短い言葉で詫びはしたものの、航太郎は尖った声のまま続けた。「言いたいことはほかにもあるんだよ。グラウ

ンドだけじゃなくて、バツセン<sup>(注5)</sup>。遠藤さんのバッティングも細井君のバッティングも、ちらつと見て終わりかよ。鉄舟、今日なんてカズと薬師院さんのケージ<sup>(注6)</sup>にベツタリだったろ。できる人間のほうが教え甲斐<sup>(注7)</sup>はあるだろうけど、代表に放置された人間がどんな気持ちでバット振ってたか、ちよつとは考えてやれよ」  
もちろん考えてたよ、と言えば嘘<sup>(注8)</sup>になる。

競うように快音を響かせるカズやしのぶの打撃に引き寄せられ、大学生たちのことなど頭からほとんど抜け落ちてしまっていた。

今日だけではない、先週もそうだ。初めてマシン打撃<sup>(注9)</sup>に挑戦する奏音に助言することもなく、出番に備えてケージの後ろでスイングのタイミングを計っているばかりだった。

自分のプレーのことばかり考え、周囲にアドバイスを送るところか気にも留めず、ミスが出れば舌打ちをする。これではまるで――。

「鉄舟さ」

<sup>(12)</sup> 航太郎が、静かに呼び掛けてきた。

「うん？」

「まだ、智修館のエースのつもりなの？」

考えていたことを、かつてのサードに先に言われた。

「やっぱり、そういうふうに見える？」

「モロ。試合でバックがミスしたときとおなじ顔してる」

酷使された末に潰された高校時代のこととは、思い出すのも忌々しい悪夢と捉えているつもりだった。事実、「智修館の、あの、大瀧鉄舟」だと気づかれまいと、極力人目を避けて暮らしてきた。

しかし、忌々しいはずのその悪夢にある種の郷シユウ<sup>(13)</sup>を抱いてはいなかっただろうか。スタンドからの歓声を一身に浴び、高

校球界に広く名が知れ渡り、マウンド上で王のように振る舞うことが許された時代に安寧を覚えてはいなかっただろうか。過去を振り切り、あのの冠詞のない大瀧鉄舟として生きることには怯えてはいなかっただろうか。

航太郎の指摘を受けてしばらくして、鉄舟はようやく言葉を発することができた。

「……おんなじ顔か。高校時代と」

「うん。あれは萎縮させられる。怒りと苛立ちと齒痒さと、あと、心細さが混じった顔」

「心細さ？」

「『ああ、もうダメだ。負けた』って顔。鉄舟、高校の頃は肩で風切って歩いてたけど、ボーイズのときはちがつてたじゃん。まだ子供だったせいもあるのかもしれないけど、でかい試合の前夜とかよく電話で『寝れない』って泣きついてきたし」

「そうだった？」

心当たりは大いにある。

「忘れたふりすんなよ」憤然としていた航太郎が、わずかに頬をゆるめた。「とにかく、高校のときはあの顔を見るのが嫌でしよ  
うがなかった。<sup>(16)</sup> 仏頂面の下から小心者の地金が覗いてて、エラーしたときとか余計に罪悪感をかき立てられた」

「そうか」

「鉄舟さ」

「うん？」

同じやりとりを繰り返す。

「なんで、また野球やろうって思ったの？」

母が準備をしたからだ。いや、それは理由ではなく経緯だ。航太郎が尋ねているのは、事情とは別にある心情のことだろう。

母の幹子がいくら準備を進めようと、その気になればクラブの結成を突っぱねることはできたはずだ。問い合わせも催ソクも無視し、ほとぼりが冷めるまで家に籠もっていればいい。

だが、自分はグラウンドに戻ってきた。挫折と肩痛と好奇の目に晒さらされるおそれを抱えながら、それでももう一度左手にグラブを嵌はめ、右手にボールを掴つかんだ。

参加者それぞれに動機と目標があるように、自分にも「せっかくの週末を半日潰して」でもバットを振り、ボールを追いかけずにはいられない理由があったはずだ。

しかし、それがなんなのかわからない。

いったい、自分はどうかしたかったのだろうか。何をしているのだろうか。ただ一人の親友を激怒させてまで。

(越谷オサム『たんぼぼ球場の決戦』幻冬舎による)

(注1) 薬師院さん——薬師院しのぶ。鉄舟が作った草野球クラブのメンバーの一人。後に登場する「カズ」「清瀬さん」「細井君

(細井隼人)」「三浦さん」「遠藤さん(遠藤奏音)」も同じ。

(注2) センターライン——キャッチャー、ピッチャー、セカンドとセンターを結ぶライン。

(注3) バックサード——外野に飛んだボールを三塁に送球すること。

(注4) アウトステップ——投球のとき踏み出した足がまっすぐよりも開いて着地すること。

(注5) バッセン——バッティングセンター。

(注6) ケージ——打撃練習のための防護かご。

(注7) マシン打撃——自動的に投球を行う機械を相手にする打撃練習。

問1 空欄番号

(1)

(8)

に入る四字熟語として、最も適切なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選び

マークしなさい。ただし、重複は避けること。

1

2

① 試行錯誤  
⑤ 信賞必罰

② 以心伝心  
⑥ 臨機応変

③ 因果応報  
⑦ 切磋琢磨せつさたくま

④ 自画自賛  
⑧ 捲土重来けんどちようらい

(1)

1

(8)

2

問2

傍線番号(2)・(9)・(14)・(16)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

3

3

6

(2) にべもない

3

- ① 頼りない
- ② そっけない
- ③ 反論できない
- ④ やるせない
- ⑤ 同意できない

(9) 業を煮やしていた

4

- ① あきれ返っていた
- ② 疑問を抱いていた
- ③ 鋭い視線を向けていた
- ④ 愛想を尽かしていた
- ⑤ 腹を立てていた

問3 傍線番号(3)・(5)・(7)・(13)・(17)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

(14) 肩で風切って

5

- ① 威勢がよく、得意そうに
- ② 屈託がなく、楽しそうに
- ③ 他人を無視し、無遠慮に
- ④ 元気があふれ、生き生きと
- ⑤ 目標に向かって、まっすぐに

(16) 仏頂面

6

- ① 他人を見下し嘲笑う顔つきあざわら
- ② 自信に満ちあふれた顔つき
- ③ 不機嫌にふくれた顔つき
- ④ 無関心を装う顔つき
- ⑤ 威厳に満ちた顔つき

(3) ツチカわれた

7

- ① 損害をバイ償する
- ② 野菜を栽バイする
- ③ 企業バイ収を成功させる
- ④ 伝染病をバイ介する
- ⑤ 美しく咲いた紅バイの花

(5) アセリ

8

- ① 事態をシヨウ握する
- ② 他人を中シヨウする
- ③ 船が岩シヨウに乗り上げる
- ④ シヨウ細に調べる
- ⑤ 時代背景にシヨウ点を当てる

(7) サトす

9

- ① 台風の影響でユ送が乱れる
- ② 比ユを用いて表現する
- ③ 小学校の教ユになる
- ④ ユ着を断つ
- ⑤ うっかりユ断する

(13) 郷シユウ

10

- ① 意見を一シユウする
- ② 学年一のシユウ才だ
- ③ 家名を世シユウする
- ④ 哀シユウを感じる
- ⑤ シユウ得物を受付に届ける

7

11

(17) 催ソク

11

- ① 雇用をソク進する
- ② 現実にソク応する
- ③ 原ソクから外れる
- ④ 土地をソク量する
- ⑤ 仲間で結ソクする

問4 傍線番号(4)「車内に漂いだした気詰まりな空気」とあるが、このような空気が生じた理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

12

- ① 鉄舟は野球クラブの代表としてチーム作りに力を入れたいが、航太郎はクラブにそこまで乗り気ではなかったから
- ② 鉄舟は野球クラブの各メンバーの適性をよく見抜いているが、航太郎はまだ彼らのことを理解していなかったから
- ③ 鉄舟は自分が元エースだという過去に執着しているが、航太郎は気持ちを新たに再出発すべきだと思っていたから
- ④ 鉄舟はクラブの布陣を考えたいが、航太郎はそれ以前に鉄舟自身の野球への取り組み方を見直してほしかったから
- ⑤ 鉄舟はチームについて意見をしたいが、航太郎は布陣を検討するのはコーチである自分の役目だと考えていたから

問5 傍線番号(6)「鉄舟、細井君とキャッチボールしたじゃん？」とあるが、航太郎が鉄舟に尋ねた理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 鉄舟がクラブのメンバーに対してどういふつもりで接しているのか確認したかったから
- ② 細井君の野球のレベルが鉄舟の言う通り「どうにもならない」ものなのか知りたかったから
- ③ 細井君のボールの投げ方では将来どこかを痛めるのではないかと気がかりだったから
- ④ 細井君が「どうにもならない」レベルだったとはいえ、彼に辞めてほしくなかったから
- ⑤ 鉄舟が考えている布陣では問題があるので、他のチームに勝てないことを指摘したかったから

問6 傍線番号(10)「相手の怒気に圧倒され」とあるが、航太郎はなぜ怒っているのか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① 草野球のクラブに入ってほしいという鉄舟の頼みを聞いたことで、せっかくの休日を潰してしまったから
- ② 鉄舟に誘われて草野球のクラブに加わったものの、鉄舟が未熟な技術のメンバーしか集められなかったから
- ③ 鉄舟はいつもメンバーのいないところで陰口を叩くばかりで、彼らの面前では注意しなかったから
- ④ 鉄舟がメンバーはそれぞれに思いがあって参加していることをわかっておらず、期待を裏切られたから
- ⑤ 仕事で皮肉や悪口などを気が滅入るほど聞かされているなか、さらに鉄舟にまで陰口を聞かされたから

問7 傍線番号(11)「タイヤの短い悲鳴にかき消された」で使われている修辭法(表現技巧)と同じ修辭法が使われている短文を、

次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① 見通しのよい交差点で一旦停止を怠ったために、パトカーにつかまってしまった
- ② この機械は古いせいか、スイッチを一度押しただけでは稼働せず、なかなか気難しい
- ③ 紅葉の手をしたかわいいう女の子が私を母親と勘違いしたのか、こちらに近づいてきた
- ④ 駅前で知り合った女性に「ちよつとお茶でも飲みませんか？」と誘ったけれども、断られてしまった
- ⑤ 駄菓子屋の前には、エサに群がるコイのように大勢の子どもたちが集まって来ていた

問8 傍線番号(12)「航太郎が、静かに呼び掛けてきた」とあるが、この時の航太郎の心情や様子の説明として、最も適切なものを、

次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 鉄舟が悪いとはいえ、彼のことを厳しく責め立て過ぎたと反省して仲直りしようとしている
- ② 鉄舟が智修館の元エースだったことをいつまでも引きずっていることをたしなめようとしている
- ③ 鉄舟が深く反省していたので、彼に智修館の元エースとしての誇りを取り戻させようとしている
- ④ 鉄舟が代表に放置された人間の心を理解したので、過去の彼の横暴さを思い出させようとしている
- ⑤ 鉄舟が自分の考え違いに気づいたので、その考えの根本にあるものに向き合ってもらおうとしている

問9 傍線番号(15)「わずかに頬をゆるめた」とあるが、航太郎はなぜ「頬をゆるめた」のか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 鉄舟の小心さという意外な一面を知ったから
- ② 鉄舟が自分に都合の悪いことは忘れていたから
- ③ 鉄舟のとぼけた受け答えがおかしかったから
- ④ 鉄舟に萎縮させられたことを思い出したから
- ⑤ 鉄舟を言い負かしたことが気持ちよかったから

問10

本文の内容と表現についての説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

18

- ① 鉄舟が智修館高校の元野球部エースという輝かしい肩書きを自らなぐり捨てるに至る過程が、微に入り細を穿<sup>う</sup>つ心理劇として巧妙かつ的確に描かれている
- ② 高校卒業以来疎遠になっていた鉄舟と航太郎が、草野球クラブの結成を通じてかつての友情を取り戻してゆく過程が、二人の軽妙で短い対話を通して描かれている
- ③ 鉄舟が草野球クラブを結成しようと思った本当の気持ちを自ら解き明かそうとするに至る過程が、航太郎との率直で親密な対話のやりとりを通して描かれている
- ④ 鉄舟と航太郎が草野球クラブを結成しようと思った動機や目的に対する考えの違いが明らかになってゆく過程が、二人の意見の対立を通じて劇的に描かれている
- ⑤ 鉄舟が草野球クラブを結成しようと思った時の強い決意がしだいに揺らいでゆく過程が、鉄舟と航太郎それぞれの心情描写と巧みな表現技巧を用いて描かれている

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(50点)

古代ギリシヤ人にとって、「民主主義の起源」は無条件で名誉であったかどうかは疑わしい。古代ギリシヤのアテネは民主制を敷いた最初の都市国家とされるが、アテネの民主制の担い手がソフィストと呼ばれる弁論術者であったことを思い起こせば、フェイクの問題が<sup>(注1)</sup>いかに根深いものであるかはすぐに見当がつくであろう。

ソフィストとは「ソフィア(知識)を操るもの」つまり「知識人」という意味であるが、彼らにとって、知識とは人を真理へと誘う手段ではなく、それを言葉に乗せて人々を説得する手段であった。馬は白いとも黒いとも、状キョウ<sup>(1)</sup>によつてどちらとも表現できるような言論の術、それがソフィストの弁論術であった。

これは大事なことである。馬が白いとも黒いともいえるということは、「馬が何であるか」を知る必要はない、ということである。いやそれどころか、「馬が何であるか」という問いさえ発する必要はない、ということである。いや、それでも足りないであろう。「馬が何であるか」という<sup>(2)</sup>、その本質へ向けた問いは発してはならないのである。

「馬が何であるか」と問えば、たとえば動物学者ならある答えを持つであろう。解剖学者なら別の答えを与えるであろう。芸術家ならまた異なつた答えをするであろう。つまり、専門家はそれなりの答えを与えるであろう。だが、ソフィストは答えを持たない。だからこそ、そのすべての答えに対応できるし、時には、そのすべての答えを受け入れることができよう。だがそうはいつてもソフィストが専門的なことについて専門家より知っているわけではない。だからソフィストは専門的な事柄を話題にし、何も知らない大衆に向けて<sup>(3)</sup>弁舌をふるうのである。そしてそこにソフィストの戦略があつた。<sup>(4)</sup>

彼は、何の答えも持たずに、専門家相手に議論を行い、あたかも専門家と同じ土俵上で論議をしているかに見せかける。しかもそれを大衆の面前で行う。それこそが、ソフィストの職業的な専門なのである。かくて、彼は、何も知らない大衆に対して、<sup>(5)</sup>あらゆる専門家と同様に、あるいは同等に物事を知っているかのように見せかけることができた。あらゆることを知っているかふるまう。まさに自らを「知識を持つもの」に見せかけるのである。

これは、善や正義といったポリスの政治に関わる問題でも同じことであつた。弁論家は真実が何であるかを知る必要はない。ただ正邪を判定する大衆がどう考えるのかということさえ知ればよいのだ、とプラトンは『パイドロス』の中で書いている。ソフィストには何の確かな考えもない。つまり真理を知りたいという真の哲学的欲求がない。彼らは、「いかにも智慧があるようにみせているが、本当には智慧ではない」(アリストテレス) ものを売り物にして、しかもそれで金銭を得る「商売人」ということになる。そしてそこにこそソフィストの強みと戦略があつた。

弁論家は、真実に関心を持つ必要は微塵もない。真実ではなく、「真実らしさ」が問題なのであり、その「らしさ」を保証するものは、大衆の思いであり、情緒であり、また思い込みなのである。彼らは哲学者を名乗りながらも、その実、むしろ一級のものであつた。ゴルギアスの定義によると、弁論術とは、法廷や議会などの国民集会で、人々を前にして、説得力を持つて正邪を争う術であつた。ということは、それは、法廷での争いがそうであるように、真実ではなく勝ち負けを争う。法廷においては、弁論人は、ある事実に対して、それをコウ定も否定もできるのである。また、国民集会のように、大衆の喝采を得ることを目論む。大衆の感情を動かすことがここでの目的になる。ここではすでに今日いうところの「劇場型政治」が見事に姿を現わしている。

ソフィストとは、「何が正しいか」を問うのではなく、大衆が何が正しいと考えているかを察知し、その方向へ議論を導く説得のための技術であつた。そのため言論競技(エリステイケー)を教える教師がソフィストであつた。実際、ソフィストは、一種の言論の教師として生活を立てる職業的知識人であつた。彼らはとりわけ政治家志望の若者に対して徳を教育する、という。ただし、この場合の徳とは、主としてポリスにおいて政治的活動や言論活動におけるタク越性を持つことである。それは、言論によって他人を説得するタク越した力である。言論は力なのである。言葉は民衆の感情を動かすことで、実際に、民衆を、そして政治を動かす。真実や正義そのものが問題なのではなく、正義らしく見せること、善であるかに見せること、つまりフェイクを作り出すことが問題であつた。何かの本質ではなく、「らしさ」が求められたからである。彼らは、「知識を持っている者」ではなく、「知識を持っているように見せている者」という意味で、彼ら自身がフェイクであつた。

このようにいうと、いかにもソフィストとは言葉の詐術師であり、人を欺く欺瞞家ぎまんであり、インチキ知識人に聞こえるが、必ずしもそれは正しくない。社会が彼を必要としたのである。しかも、社会の方は、物事の本当の真理などというものは必要とはしていなかった。いいや、本当の真理などあろうがなからうがどちらでもかまわない。社会がそれなりにうまくいけばよいのである。現実の政治は、まさしくプラトンが批判したように、永遠の真理や、真に優れたポリスなどという「真なるもの」ではなく、人々の欲するものを与えればよい。それが、人々の利益になり、人々の愉楽になればよい。永遠の真理などではなく、現実の利益や快楽の方が大事なのである。

その意味で、社会は、ソクラテスではなくソフィストを求めた。<sup>(11)</sup> 政治もいうまでもなくそうであった。政治は何も絶対的な真理にホウ仕するものではない。<sup>(12)</sup> これも人々の利益と快楽にホウ仕すればよいではないか、というのだ。このことに言い分がない訳ではない。だからこそ、ソフィストは、その弁論術によって金銭を稼ぐことができ、社会に対して強い影響力も持っていたわけである。

われわれはつい現代のメディアに登場して、ありとあらゆる事柄に対してもっともな答えを出してくれるコメンテーターや知識人を思い起こしてしまう。確かに、どうもいまも昔も「知識人」とは、あたかもどんな知識でも持っているように「見せかける人」であるようだ。21世紀のこの時代の知識人（知識を持った人）も紀元前ギリシャのソフィストの正統な末裔まうえいのように見える。だが、今日でもまた古代ギリシャと同様に、社会が彼らを必要としており、そして、現実に、彼らは社会に対して大きな影響力を持つ。

ただここで重要なことは、ギリシャ最大のソフィストと呼ばれたプロタゴラスの有名な言葉を想起することだ。<sup>(13)</sup> 「万物の尺度は人間である」という言葉である。これは、しばしば、近代の人間中心主義のはしりのようにも解されるが、もともとはそうではなく、物事の価値は人によって異なる、という意味であった。「万物の」の「物（クレーマタ）」とは日常の生活を支える有用なものという意味のようである。だから、ここでプロタゴラスがいうのは、ものの価値は市民一人一人によって違っている。だからそれを民会等を通じて市民にとって「有用なもの」、「利益のあるもの」へともたらすことが大事だというのである。プロタゴ

ラスからしてみれば、永遠の真理や、絶対的な善などというものは、いずれわかるものではない。いや、わかってはならない。とすれば、物事には多面的な様相があり、物事のあり様は常に相対的でしかない。この相対主義に立てば、あい反する立場がひとつの主題に含まれていても不思議ではないだろう。見方が違えば同じものでも違って見える。プラトンからすれば、それはフェイクかもしれないが、プロタゴラスからすれば、そもそもフェイクなどという言い方が成り立たないであろう。

だがまさにそこに<sup>(14)</sup>プロタゴラスの決定的な矛盾が<sup>あら</sup>露わになる。それはこういうことだ。もし「万物の尺度は個々の人々である」という相対主義を取り、客観的で万人にとつての「真理」など存在しないとすると、一人一人の人間が、自分が自分にとつて「善い」と思いなすものがすべて彼にとつての真理となる。太郎には太郎の真理があり、次郎には次郎の真理があつて、その間の優越を論じることはできない。だがそうだとすれば、どうしてソフィストは他人に対して知識を教授するなどということが可能になるのか。プロタゴラスは自らをギリシャ世界随一の「知者」であると自認し、自ら臆することなく「ソフィスト（知識を持つ者）」と名乗っていた。つまりプロタゴラスは、人によつて知識の優劣があると想定していることになる。だが、万人が自分の真理の基準を持っているなら、なぜそんな想定が可能なのだろうか。

いったいどうして彼は他人に知識を授け、まして自らを「知者」などということができるのであるのか。人々は自らが智慧の尺度であれば、どうして、ソフィストにわざわざ金銭を支払つてまで知識を教授してもらう必要があるのか。こうソクラテスは『テアイテトス』において問いかける。これは強烈で根底的なプロタゴラスに対する批判であつた。

この批判が重要なのは、ソフィストの背後に重要なある哲学的立場をソクラテスは見ていたからである。それは、ヘラクレイトスが述べたとされる「万物は流転する」から始まるような思考であつた（ヘラクレイトス自身はこの言葉を残していないが）。万物が流転すれば、われわれが捉えられるのは、その都度、その都度の感覚による認識でしかない。永遠で固定されたものなど存在しない。したがつて、認識は、時間と場所に関して、またそれを認識する主体によつて相対的であろう。感覚は人によつて違うからである。ある人にとっては花は美しいが、別の人にとっては花は醜い。人の感覚は違っている。そして、このヘラクレイトス説の<sup>(15)</sup>エン長上にプロタゴラスの「万物の尺度は人間である」説がでてくる。人によつて感覚は異なっている

ので、花は美しいとも醜いともいえる。共通の真理など存在しない。これがソフィストの立場であった。そして、この相対主義が民主政を通して政治的行為そのものの原理とみなされることに対し、ソクラテスは決定的な危機感<sup>(16)</sup>を持ったのである。

(佐伯啓思『近代の虚妄』による)

(注1) フェイクの問題——この文章より前の箇所、筆者は、一般的に「客観的事実」や「真実」とされる概念さえも、捉え方によっては、フェイク(虚偽の情報)となり得ることについて触れている。

(注2) プラトン——古代ギリシャの哲学者。後のアリストテレス、ゴルギアス、ソクラテス、ヘラクレイトスも同じ。なお、プラトンはソクラテスの、アリストテレスはプラトンの弟子である。

問1 傍線番号(1)・(7)・(10)・(12)・(15)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

19  
 )  
 23

(1)

状キヨウ

19

- ① お互いに妥キヨウする
- ② 熱キヨウ的に応援する
- ③ 天候に恵まれずキヨウ作だ
- ④ 驚きのあまり絶キヨウする
- ⑤ 電話で彼の近キヨウを知る

(7)

コウ定

20

- ① 好みの芳コウ剤を置く
- ② 脂肪を分解するコウ素
- ③ 教授の話に首コウする
- ④ 珍しいコウ石を発見する
- ⑤ 新しいコウ貨が発行される

(10)

タク越性

21

- ① 荷物のタク配を依頼する
- ② 家族で食タクを囲む
- ③ 光タクのある服を着る
- ④ 洗タク可能な衣類
- ⑤ 土地を開タクする

(12)

ホウ仕

22

- ① 外国からの来ホウ者が増える
- ② 神社にお酒をホウ納する
- ③ 富士山は日本の最高ホウだ
- ④ ホウ物殿を見学する
- ⑤ 気ホウが次々に発生する

(15)

エン長上

23

- ① 昔から犬エンの仲である
- ② 親戚を招いて祝エンを催す
- ③ 雪の影響で電車が遅エンする
- ④ エン直方向に線を引く
- ⑤ エン側に座ってくつろぐ

問2 傍線番号(2)「その本質へ向けた問いは発してはならないのである」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 24

- ① ソフィストは、フェイク問題に関与することは許されていないから
- ② ソフィストは、絶対的な真実と言える答えを自分の中に持っていないから
- ③ ソフィストは、本質は何かという問いに答えることを禁止されているから
- ④ ソフィストは、ものの本質は弁論によって否定されると認識しているから
- ⑤ ソフィストは、アテネの民主制に従うことを義務づけられているから

問3 傍線番号(3)・(8)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 25 ・ 26

- (3) 弁舌をふるう 25
- ① 得意になる
  - ② からかう
  - ③ 述べ立てる
  - ④ 言い争う
  - ⑤ 非難する

- (8) 喝采を得る 26
- ① 激励される
  - ② 報酬を受け取る
  - ③ 批判される
  - ④ ほめそやされる
  - ⑤ 野次を浴びる

問4 傍線番号(4)「そこにソフィストの戦略があった」とあるが、「ソフィストの戦略」とはどのような戦略か。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

27

- ① あらゆる話題に通じている自分を示して、専門性の高さを証明しようという戦略
- ② 弁論家としての職業的な技術を示すために、専門家と同じ土俵に立つという戦略
- ③ 善や正義といったポリスの政治に関わる論議に、自分自身も加わろうという戦略
- ④ 物事の真理を知ることよりも、むしろ大衆の考え方をこっそり学ぼうという戦略
- ⑤ 公に専門的な議論を行い、専門家さながらの知識人に自らを演出するという戦略

問5 傍線番号(5)・(9)の語句の品詞を、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

28

29

- ① 感動詞
- ② 副詞
- ③ 形容詞
- ④ 形容動詞
- ⑤ 連体詞

(5) あらゆる

28

(9) とりわけ

29

問6 空欄番号

(6)

に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

30

- ① 心理分析家
- ② 論理学者
- ③ 預言者
- ④ 倫理学者
- ⑤ 似非政治家えいせいせい

問7

傍線番号(11)「社会は、ソクラテスではなくソフィストを求めた」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

31

- ① 社会が求めていたのは壮大な理想を語る政治ではなく、少しでも確実な利益を生み出そうとする政治だったから
- ② ソフィストは欺瞞家でインチキ知識人に見える一方で、ソクラテスにはない強い統制力を持つとされていたから
- ③ 真理を追究することよりも、利益や快楽など現実的な恩恵を社会にもたらす存在に大衆からの需要があったから
- ④ ソフィストは弁論術を駆使して金銭を稼ぐことによって、社会に対して強い影響力を持つようになっていたから
- ⑤ 正しい政治のあり方として、真理を求めるのではなく合理的に結果を出そうとする姿勢のほうが評価されたから

問8 傍線番号(13)「プロタゴラスの有名な言葉を想起する」とあるが、「プロタゴラスの有名な言葉」を引用することで筆者は

どのようなことを示そうとしているか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

32

- ① プロタゴラスとプラトンでは、ひとつの主題に対する見解が基本的なレベルで異なっていたこと
- ② プロタゴラスとプラトンでは、真理の追究にいたるアプローチの方法が完全に相反していたこと
- ③ プロタゴラスの取る立場に基づけば、プラトンのような価値基準は簡単に否定されてしまうこと
- ④ プロタゴラスがなぜ社会に大きな影響を与えるのかは、プラトンとの相違によって判明すること
- ⑤ プロタゴラスはそもそもフェイクという概念を知らず、プラトンは違う思想を抱いていたこと

問9 傍線番号(14)「プロタゴラスの決定的な矛盾」とはどのようなことか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の

中から一つ選びマークしなさい。

33

- ① 永遠の真理や絶対的な善などを理想としながら、相手ごとに異なる知識を教授していること
- ② 誰にでも受け入れられる真理などはないとしながら、大衆に絶対的な本質を説いていること
- ③ 万人がそれぞれに個々の真理を持つとしながら、人により知識の優劣があると見ていること
- ④ 物事のあり様は常に相対的なものであるとしながら、金銭的な価値ばかりを求めていること
- ⑤ 自らをギリシャ随一の「知者」であると言いながら、他者の知識を借りて弁論していること

問10 傍線番号(16)「決定的な危機感」とあるが、どのようなことに対する「危機感」か。その説明として、最も適切なものを、

次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

34

- ① 見せかけだけで政治力のないソフィストが、フェイクにより人を扇動しようとする事
- ② 主義・主張を持たないプロタゴラスのようなソフィストが、政治の世界に参加すること
- ③ 政治が物事の真理の追究を放棄し、市民としての共通の目標や一体感が見失われること
- ④ 相対主義が政治の原理となつて民衆を支配し、信条の異なる自分の立場が弱くなること
- ⑤ ソフィストの立場が大衆から支持され、相対主義が今後の政治的行為の主流となること

問11 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

35

- ① ソフィストは社会から敬遠され、遠ざけられた知識人たちであると定義づけることができる
- ② ソフィスト特有の弁論術は、大衆への説得力を基準にして真理の正邪を争う手段だと言える
- ③ ソフィストは大衆の思いを大切にし、時には真理を明らかにしようと努める哲学者であった
- ④ プロタゴラスは、永遠の真理とは追究し続けてわかるような類たぐいのものではないと考えていた
- ⑤ ソクラテスは、プロタゴラスとヘラクレイトスの説を互いに異質なものであると捉えていた